喜栄先生の遠近法

小馬　徹

少し距離をおくと、伊藤先生の体軀はどっしりと実に大きく見える。廊下の向こう側から静かに歩いていらっしゃる姿には、自ずからなる威厳があった。ところが、挨拶を交して行き違う間際になると、小柄な方だと気付かされて、いつも意外に思ったものだ。先生と同じ年に神大に赴任して以来十年余、この不思議な感覚はずっと変らず、消え去ることがなかった。

体軀と同じで、少し距離をおくと、先生の存在感は実に大きかった。定年が迫っても少しも弛まず、海外の学会で座長を務められ、革新的な経済地理学の編著書や訳書を世に問い続けられた。ところが、関係が身近になればなるほど、先生の存在はとても慎ましく親しいものになる。権威的な風は微塵もなく、誰に対しても親しみをこめて接し、何事も真っ直ぐに話される方だった。学生に信をおくこと殊に篤く、常に学生本位を貫かれた姿勢は（不思議であろうはずはないが）感嘆に値するという他はない。

ご自身が『モナド』（外国語学部基本科目部会誌）に寄せられた幾編かの回想文を改めて読んでみると、（地理学

者でありながら？）先生の「距離感覚」、つまり人生の間合いの取り方は、ちょっとばかり独特だったといえるだろう。率直にいえば、いくらか不運で、かなり不器用だった。

先生は十三歳の時に、全国えり抜きの秀才の一人として、（敗戦までの五カ月間ではあったが）大日本帝国陸軍幼年学校に学ばれた。そこで当時は軍の機密資料だった五万分の一の地形図を眼にして、その精度の高さに驚嘆されることになる。この経験が、先生の将来を方向付けたのだ。ご実家の事情から地元の名古屋大学工学部に進まれたが、入学後初めて、志望する都市計画学科・建築学科が設置されていないと気付かれた。そこで、次善の策として、新設間もない地理学講座（文学部）に転部される。一九五一年秋のことである。

ところが松井武敏、喜多村俊夫という地理学の二人の教授は、侵略戦争に加担した戦前の地理学（地政学）の主流からやや距離をおき、（哲学ならぬ）「地理学の貧困」を思って日々葛藤している方たちだった。彼らは、地理学というつまらない学問の成果を学んでも賢くはならないと言いつのる、一風変わった、地理学嫌いの地理学者たちでもあった。伊藤先生は、この二人の恩師から、地理学そのものよりも、経済史と社会科学の方法論を学ばれたという。だから、「私が、日本の伝統的な地理学から見て、素直で優等生的な地理学者に育つわけがない。いびつで、ひねくれた地理学者として学界に登場することになってしまった」と、先生は書かれている。

先生は、恩師たちの学風を鵜呑みにはなさらず、では「つまらなくない地理学」を作ってやろうと決意して、独自の精進を重ねられた。ただ、社会科学の体系の中に地理学を位置づけようとするその方向性は、まさに二人の恩師の学問のものだった。それは一九六〇年代から雪崩をうって日本に入ってきた、計量地理学を中核とする近代地理学とは真っ向からぶつかったのだが、先生の愚直なまでに真摯な学風は、結局、定年まで（そして今もなお）変

わらない、学界の高い評価と出版界の確かな支持を勝ち取ったのである。先生は学恩を顧みて、「我が恩師の逆説的教育法」と呼ばれている。

先生の温かく且つ率直な、懐の深い人柄は学生に愛され、心から信頼された。先にも触れた通り、教師としての伊藤先生は終始学生を愛し、誰よりも尊重する姿勢を貫かれたが、それもまた一義的にスマートなものだったとばかりはいえない。特に、大学当局や社会が両者の関係に絡んでくる時にはそうであった。

先生を慕ったのは、学生だけではない。教員として最初に赴任された大分大学では、月給は毎晩のように先生の宿舎に群れ集う仲間の若い教員たちの飲食代に消えたそうである。また、シェフィールド大学に留学された時には、いつの間にか、先生の宿舎が在留日本人たちのサロンのようになってしまったと伺っている。先生の寛大で飾らない人柄と、自ずからなる徳のしからしむるところに違いない。

ただし、我知らず、最も困難な状況に立ち至られたのが、（大分大学離任後、名古屋市立大学を経て赴任された）金沢大学時代である。当時、まだ三十代半ばの先生は、「そのことが身を滅ぼす第一歩であることをつゆ知る由もなく、金沢大学のノンセクト・ラジカル系の学生、後に小さいながらも全共闘となる学生諸君とかなりねばり強く議論を繰り返」されたそうだ。先生は、理論武装という「不純な動機によって近づいた『知』の世界にのめり込んでいった」彼らを邪険に疎んじることなく、「紛争解決の一助になるかとも思い、時には彼等の招きに応じ、また他のある場合には積極的に説得する機会を求めて、彼らのこの学習の場に身を置いたこともしばしば」だったと、自ら回想されている。

その経験が「私のその後の研究に対して、その幅を広げ、また奥行きを与えたという意味で無駄ではなかった」

と仰るのだが、それが金沢大学での先生の研究環境を大きく困難なものにしたのは間違いあるまい。間もなく慶応大学に移られ、やがて七十歳定年制の神奈川大学に魅力を感じて赴任されることになったのである。

本学外国語学部では、基本科目部会に属し、大教室での講義を中心に担当された。若い気鋭の地理学者たちを束ねて、近代地理学に抗する社会科学としての地理学を推進されていた伊藤先生にとっては、あるいは専門の地理学者の養成が難しい、不本意なポストであったかも知れない。しかしながら、円熟期の先生に、しかも「思想としての地理学」を大教室の多くの学生の前で講じて頂けたのは、神大にとってこれ以上ない幸いだったと思わずにいられない。私のゼミの最も優れた学生の一人だったKさんが、数年前に伊藤先生の講義を受講していて、一つの大きな世界観が毎回着々と広がりを見せていく講義に感嘆して止まなかったことを、今、密かな羨望と共に鮮かに思い起こしている。

最後に、基本科目部会の不本位な環境の中でも、伊藤先生が幾名かの地理学の専門家を世に送りだされたことを、忘れずに申し添えておきたい。

以上に一端を述べたように、神大にとっても私個人にとっても、伊藤先生は誠に大きな存在だった。その先生が定年で退職されて、遠くから眺めることになった今、そのお姿は親しく聲咳に接することができた時に比べてもいよいよ大きく感じられてならない。